建設系高校生による「～建設業に思いを込めて～」作文の部

最優秀賞

「都市工学に触れて　建設業の新しい魅力」

愛知県立岡崎工科高等学校 都市工学科 3年

米津　恒希

私は高校三年間で都市工学について学び、橋や道路、トンネルなど、私たちの生活に欠かせない構造物がどのように造られているのかを知りました。これらのインフラは、人々の暮らしを安全かつ快適にするために整備されており、地域の発展や防災にも重要な役割を果たしています。普段何気なく利用している道路や橋が、多くの人々の努力によって成り立っていることを知ったとき、建設業が社会にとって必要不可欠な仕事であることを強く実感しました。

建設業は、鉄道や道路などの交通インフラを整備することで、人や物の流通を促進し、地域の魅力を高め、経済の活性化に大きく貢献しています。さらに、災害に強いインフラや防災設備の設計、都市計画などを通じて、安全で豊かな暮らしを支える社会基盤を築いています。こうした取り組みは、目に見える形で人々の生活を支えるだけでなく、社会のあらゆる面に関わりながら、間接的に社会全体の成長を促す重要な役割を果たしていると感じます。

当初、建設業には「きつい・汚い・危険」という 3K のイメージがあり、過酷な職業という印象を持っていました。しかし、高校での学習や現場見学、インターンシップなどの実体験を通して、その印象は大きく変わりました。確かに体力や注意力を求められる仕事ではありますが、完成したときの達成感は何ものにも代えがたいものであり、自分たちの仕事が人々の暮らしを支えているという実感や、地図に残る構造物を未来へと受け継ぐ誇りを通じて、建設業には数えきれないほどの魅力があると感じるようになりました。

現場を訪れた際には、構造物が完成するまでの工程において、それぞれに高い専門性が求められていることを知りました。計画・設計を担う人、安全や工程の管理を行う人、現場で作業を行う人など、様々な立場の人々が協力し合ってひとつの構造物を造り上げていく姿に感動しました。チームで仕事を進める中では、コミュニケーション能力や問題解決能力も重要であり、ものづくりの現場には多くの学びがあると感じました。また、構造物の建設には長い年月と地道な努力が必要であり、その積み重ねが街の発展へとつながっていることに、建設業の社会的意義と魅力を改めて実感しました。

企業の方との交流や現場見学を通じて、建設業に携わる人々が「誰かの役に立ちたい」「自分の仕事の成果を形に残したい」といった強い想いを持っていることを知りました。辛かったことや嬉しかったことなどの経験談からも、それぞれが誇りを持って仕事に取り組んでいる姿勢が伝わり、建設業の魅力をさらに深く感じるようになりました。以前は、建設業に対して上下関係が厳しく、張り詰めた雰囲気の職場というイメージを持っていましたが、実際は異なり、現場では気軽に会話が交わされ、和やかな雰囲気の中で協力することで円滑な作業が行われていました。建設業に対するイメージが変わるとともに、コミュニケーションの大切さも学ぶことができました。

職場見学では、安全管理の重要性や測量の正確さ、現場で求められる高い技術力を目の当たりにしました。地盤の高さのわずかなずれにも細心の注意を払い、少しのミスでもやり直す姿勢からは、構造物を安全かつ効率的に造り上げるための責任感とプロ意識を強く感じました。

現在、建設業では若手技術者の減少による人手不足が深刻な課題となっています。私自身、高校で土木を学ぶまでは建設業に関心を持っていませんでしたが、学びを通じてその奥深さと社会的意義に気付きました。ICT や AI などの最先端技術の導入により、働き方が変化し、若者が興味を持ちやすい環境が整いつつあることを実感しています。これらの技術を取り入れることで仕事の効率化や人手不足の改善にもつながっており、ワークライフバランスを保ちながら、大きな達成感を得ることができる魅力ある職業であると感じています。

こうした学びや経験を通じて、私は将来、建設業界で人々の暮らしを支える仕事に携わりたいと強く思うようになりました。特に建築設計士という職業に興味があり、人々に寄り添った住環境を提供することで、安心と快適を届けたいと考えています。高校での学びを活かしながら専門的な知識と技術を身に付けて、自分の仕事に誇りを持って取り組んでいきたいです。そして、時代の流れが早い現代社会を生き抜くために、学び続ける姿勢を忘れずにいたいです。

建設系高校生による「～建設業に思いを込めて～」作文の部

優　秀　賞

「身の回りにある建設・造園の大切さ」

愛知県立猿投農林高等学校 環境デザイン科　1年

今田　　葵

普段の生活の中で「建設業」や「造園業」を意識することはあまりありませんでした。しかし、猿投農林高校に入って建設や造園に触れる機会が増えたり、家の近くで行われている工事を見たりするうちに、身近な景色の見え方が変わってきました。近所の公園の選ばれた木々や整えられた芝生を見て、「これらは誰かが丁寧に作り上げたものなんだ」と気づいたのです。

私たちが安心して過ごせる場所には、必ず建設業や造園業の人たちの努力があります。例えば、公園の遊具は安全に作られており、木の根が道を壊さないように調整されているのを見たことがあります。目に見えないところで多くの工夫がなされているのだと感じました。

また、工事が進んでいく様子を近くで見ていると、新しいものが少しずつ形になる過程が面白く、「もし自分が将来この仕事に携わったら達成感が大きいだろうな」と思いました。人のために空間をつくる仕事であることに強い魅力を感じます。もともと人の役に立つことが好きなので、「誰かの暮らしを支える場所をつくる」というのはとてもやりがいのある仕事だと思います。

もしこの分野に進むことができたら、使いやすいだけでなく見た目や雰囲気にもこだわり、訪れる人の気持ちが明るくなるような場所をつくりたいです。
例えば、季節の花を楽しめる空間や、誰でも利用しやすいバリアフリーの公園など、「細かいけれど大切な工夫」を考えられる人になりたいです。

そのためには、設計や構造の知識だけでなく、ヒューマンスケールと呼ばれるような人々の動きや使い方をよく観察する力が必要だと思います。また、実際にその場所を使う人の声をしっかりと聞き、「自分だったらこうしてほしい」という視点を持ちながら、その場所に合った空間づくりをしていきたいです。

さらに最近では、公園や広場が災害時の避難場所としても注目されています。日常で安心して利用できるだけでなく、いざという時に役立つ場所をつくることも、建設や造園の大切な役割だと思いました。地震や台風などの災害にも対応できる、安全で強い場所づくりを意識することが必要だと感じます。

建設や造園の仕事は、ただ「ものをつくる」だけでなく、「人の生活を支え、未来をつくる」仕事です。
将来もしこの分野に進むことができたら、使う人のことをしっかり考え、誰もが「ここに来てよかった」と思えるような場所をつくりたいです。そのためにこれからは、日常のなかでも建物や景観に目を向けて「なぜこういう形なのか」「どうしてこういう配置なのか」を考える習慣をつけ、周囲をよく観察して知識を少しずつ増やしていきたいと思います。

そしていつか、自分自身の手で、誰かの心に残る空間をつくれるようになりたいです。